

猪犬と登る猪猟の頂点へ

猪猟の上級編

④

田宮 治

止め猪は、度胸で撃て！

猛暑続きで思うような訓練がで

きず、少し不安を持つての獵期突入である。仔犬の仕上げは、ゴン助、カン助、カク号、リキ号だったが、思うように山引きしなかったのが原因で、まだまだ山彦会千葉支部では使えない。

二秋目と三秋目を迎える犬群で、今年こそ、人も犬も、共に頂点に立たせねばならない。それでも、初獵前日に支部長の北嶋氏が下見してくれたいつもの山には、小物の猪だが三頭入っていると報告があった。

平成二十二年十一月十五日、解禁日は月曜日だったので、平野氏と北嶋氏の三人であったが、「そんな小物ならすぐ咬むよ」と絶対

の自信を持って、マロ号、ヨシ号、シロ号にちょうど良い機会だからと北嶋氏の持ち犬三頭を一緒に放した。

小物なら咬み込みを見守ることで、若犬たちの上達につながる作戦であったが、その目論見は、ものの見事に外れてしまった。いつもの獵場であり、勝手知ったる山なので、必ずそこに入っていると安易に考えたのが悪く、猪の姿はどこにもなく、あたり（せつかくの）初日は空振りで終わってしまった。

それでも、犬群は良い動きをしていたが、初日とあって張り切り過ぎで先っ走り、若犬をうまく先導できないようだった。

二秋目のシロ号が北嶋氏の若犬を「邪魔だ」と威嚇して、牝犬同士の小競り合いをやっているが、

大喧嘩にならないように、「シロ、ダメだぞ！」と大声で注意する。

猪が近くにいるすぐ止め鳴きになればこんな小競り合いもなく、若犬もろとも猪に集中するので何の問題もないのだが、猪のいる気配がなくては仕方がない。

ヨシ号とマロ号は、抜けた小猪の後を追って大峰を越えて、第二ラウンドに予定している裏山まで狩り込んでいる。もう二時間も経つというのに、鳴き声一つ入らず静かなものである。何ともおかしな間延びした初日である。

おかしいのは、入っているはずの三頭の猪だけでなく、季節までも、十一月だというのに異常な暑さである。特に千葉の獵場は暖いので雪が降らず、年中葉が落ちない樹木が多く、踏み込めない青藪も多い。

絶対の自信で放犬したのに猪どころではなく、三十分もするとびっしょりの汗である。こんなはずではなかったと、慌てて抜けた猪跡を探すものの、まだ誰も分け入っていないので、狩り道も、狩り場全体までもが人の立ち入りを拒んでいるように思える。猪跡を捨てるのも容易ではない。

それでも、昨年は大獵で、このホームグラウンドの山では大物や中物がよく獲れた。山彦会千葉支部としては、全体的によく頑張った、思いどおりの急成長を遂げてくれたが、猪猟は元々がそんな生やさしい世界ではない。

まして、一年で頂点までと思った私の道案内に多少無理があったようで、何度も紙一重の戦いに敗れている。

しかしながら、そんな頂点付近



での戦いこそが重要であり、勝つても負けても、それなりの成果が実績として培われ、確実な実力となって今猟期につながっているのだ。

でオフシーズンを乗り越えて、それこそ自信を持つての初戦であったが、この暑さでは何もかもがどうもおかしい。

長年猟をやってきたが、こんな

に暑い初日はなかった。流れる汗をタオルで拭いながら、しばし小峰に立ち、激戦の思い出にニヤニ

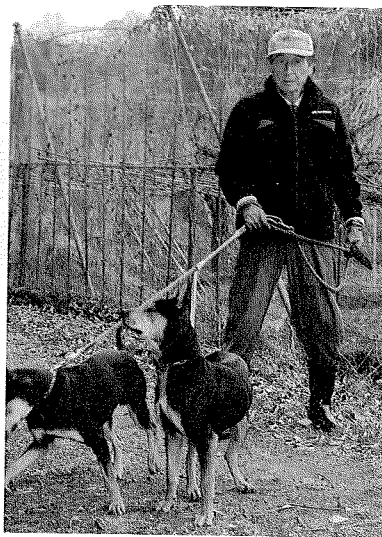
ヤしている。

時代が移り変わり、ここまでくると、猟人は風変わりな時代に逆流する人種と思われがちであるが、どっこいそんなことはない。根

性も感情も人一倍強いのである。うまい具合に「ここから狙って、あそこで……」とか、至る所

にある(ドキッとする思い出の)猪の止め現場に差しかかると、注意して沢下まで覗き込むのであるが、この点検が大変重要な作業なのである。

頂点付近の戦い、つまり紙一重の戦いを確実に制するためには、止め現場を改めてよく見ることで



(右)

ブイ号とカツ号。どんなに一流芸になろうと、忘れてならない大切なのが毎日の「綱引き訓練」である。この基本訓練こそが、猟場で何倍もの楽しさに変わるのだ

(上)

ブイ号の猪止める瞬間。追っているのが武蔵号とカツ号である。咬み止める重要点は一頭が先回りして、頭に食い下がることである。どんな大物でも、追いつがりさま素早く頭にガブリいけば、必ず止まるものである。一見簡単そうに見えるが、この芸は一流芸である



山彦会千葉支部 (左から棟方氏、平野氏、私、北嶋支部長、新人の板東氏)

あり、その時にうまい具合に猪が撃ち獲れた時と、惜しくも逃した時のことを考えて、緻密に観察することである。

特に普通の山で、通常の猪ならここで必ず寝屋を飛び出せばあそこで止まるはずだ。そんな考えで、絶対の自信を持って対策を打ったのに逃げられてしまったのである。

だから、まずその場で、堂々と逃げた猪の逃走術と逃走経路を、その時の気持ちになって見直すことである。

私がいつも言っていることは、猟期にできなかった欠点の修復作業こそが、頂点に登る大事な近道であり、物事の成功や完成に欠かせない重要案件なのである。

獵人のことであれ、犬たちのことであれ、また猟期、非猟期を問わず、常に心がけなければ先に進まないのが、進化・改良への情熱と強い向上心である。とにかく迷わず、できるまで挑戦し続けることである。

さらに実戦に当たったの注意点は、獵場の状況と猪の棲み着く習

性である。犬たちを上手に誘導し、何度も猪を狩り立ててみることである。そうすれば、猪はどこに寝ていて、犬たちに追われると、どの道を通ってどのような逃げ方をするのか。

さらに、犬たちに攻め立てられた場合、その猪がどのように変身するのかなどを含めて、狩る山の隅々まで十分に考えて、知り尽くさないことには思いどおりの完璧な猪猟はできないのである。

その上で「この山では止めづらから、どこまでも追って止め切れる犬たちにしよう」とか、「この跡は大物だから、百戦錬磨のこの犬とこの犬にしよう」という具合に、犬たちの一芸、つまり犬たちの持ち味を吟味した上で、必ず飛び出してくる猪に完勝できる犬群（頭数）で戦うことなのである。

「そんなことは当たり前だ」と思われる猪獵人も多いと思うが、この道理を十分に理解した上で、その状況に瞬時に対応できていれば、猪止め犬群を使つての猪獵は相当の腕前であり、達人級の獵人であると思う。

基本的には上級編であっても、猪獵そのものには何の変わりもないと思うが、猪止め犬群による上級編となると、猪との戦い方ががらりと変わるのである。

同じように思われがちな、追い犬を使役しての勢子長や、何十年もタツを立派に張り通した達人であつたとしても、一流猪止め犬群の止め現場は容易く勝負ができるものではなく、想像を遙かに超える恐ろしい世界なのである。

そんな説明をいくらしたところで、決して分からないのが上級編である。特に理解できない肝心の要点を具体的に俺流で押し出し、やって見せて、確実に覚えてもらうのが山彦会千葉支部の今猟期の目標である。

当支部では、猪止め獵の流れは一秋にして十分体験して、確実に実戦できるまでに急成長を遂げている。

しかし、本当に難しく、しかも危険で避けて通れない大事なことがある。それは止め猪への寄り付きと、できるだけ近寄つての近射

(五〇センチ〜三メートル)の極意の修得である。

ある。

「何だ、そんなことか」と侮るなかれ。本物の一流咬み犬群による激戦の止め現場は実に恐ろしいもので、まさに興奮の坩堝である。

並の獵人や生半可な猪獵技術では、迂闊に寄り付けものではない。

大物獵では「度胸で撃て！」と私は心得ている。クマであろうと大猪であろうと、逃げては絶対駄目である。強い気持ちで攻め込み、できる限り近寄つて勝負するのが基本である。

私の生まれ故郷では、昔からクマ獵人は二十歳になった時、一人で懐中電灯を手にくマ穴に入るといふ風習が残っている。このことは、まさに「クマに負けない度胸を持つて」という教えである。自分もって大物獵人は失格であるということだ。

欠点を克服することが成長への近道

どんな理由をつけようと、狩る

大物が怖くて逃げ回っていたので話にならない。

絶対に負けないという根性で勇気を出して、原点からきっちり手順を踏んで攻めの技術を確実に身につけることである。決して焦らず、何度も繰り返すことで、できなかつたことを必ずできるようにするのが、何よりも大切な成長への近道なのである。

ちなみに、近道は遠回りするのが面倒だから覚え使うのではない。遠回りは、そのほとんどが失敗や挫折から立ち直るための時間である。

誰もが迷うことなく、猪猟のど



真ん中を一直線で頂点にたどり着くためには、近道となる大事な猪

猟技術の改善や猪犬の進化・改良などをよく考えた上で、自らの弛まめ努力と挑戦によって極限まで高めておきたいものである。

そして、難題に突き当たった時や、ここぞと思うその時に、これを武器にして乗り越えるのである。

もし、この煩わしい地道な改善努力や改良作業を怠り、片時でも休むようなことになったら、どんな名犬や達人であったとしても、頂点を極めるどころか、たちまち真逆さまに谷底に落ちるのである。

そのことを証明するかのよう

に、猪猟界でよくある例として、名声を馳せた時の名犬や名人たちが、突然、鳴りを潜めたり姿を消してしまふのは、過信やおごり、安心感で、ほんの束の間であつても気を抜き、努力をしなくなるのが原因のように思えて残念で仕方がない。

振り返ってよく考えてみると、そんな誰にでも分かる当然すぎる道理でも、しよせんは人間のやることであつて、神様のようなわけにはいかない。

しかしながら、人間はどうなるか分かりにくい頂点間近の、この

辺からが本当の考えどころであり、根性を押し出している勝負どころとなるのである。

猪猟人である以上は、今までの体験を大切に、やるべきことをすべてやってみて、これこそが一番良い猪猟法だと決めたからには、自信を持って押し出していく。そして、さらに鍛練することで人ができる限界まで高めていき、神業級に膨らませて、願わくば神風なるものに乗って一気呵成といきたいものである。

夢の頂点は、偶然や奇跡までも味方にする努力によってのみ到達できるのである。(つづく)



(右)

(上)

本来は一〇〇キロ以上であろうと思うが、オスなのに八〇キロもない。瘦せて、追っかけが始まる時のように肉質が悪く、せつかく獲っても誰も肉を欲しがらない。頭にもくるが、仕方のないことである。イノシシでも減量作戦に成功？して、何でだろうと思うほど瘦せてガリガリである。それ故、逃げ足は速く、とてつもなく強くなつていた。猛暑による「大変身」と考えるよりほかに、私には思い当たる原因がない。